

ま と め

西欧神学の相対化

- 一つの文化 → 西欧文化
- 一つの人種 → 白人
- 一つの性 → 男性
- 一つの階級 → 支配階級
- 一つの宗教 → キリスト教

神学とコンテクストの関係

- 誰が
 - どこで
 - 何のために
 - どのような
- 
- 神学を必要とするのか？

経験的規範による聖書解釈

- 経験に即して、それぞれの聖書テキストに価値の重みを分配することは、解釈上、必要である。
- しかし、自分の立場を「正当化」するために聖書を利用（悪用）することに対しては、批判的な視点を持たなければならない。

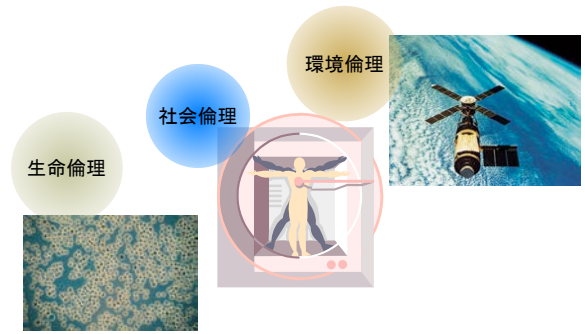
グローバル・エシックスの土台 としての宗教間対話

- キリスト教の中だけで、あるいは、キリスト教の力だけで、社会倫理にかかわる現代的課題を解決することはできない。
- 異なる信仰・価値観を持つ人々が平和で安定した生活を送るためには、他の宗教への理解や、それらとの対話・協力を欠くことができない。

ま と め

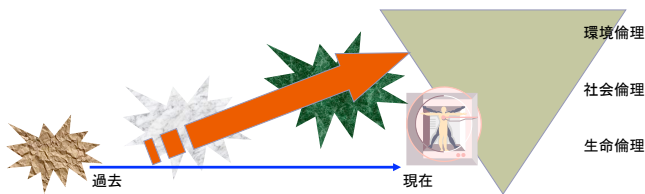
多様な倫理的視点の
「網の目」の中で

人間と世界の関係——コスモロジー



コスモロジーの変遷

共時的 (synchronic) 視点から、通時的 (diachronic) 視点へ。



地球中心主義 の終わり



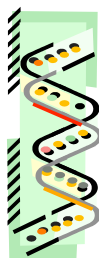
- 地動説革命
- 17世紀、コペルニクス、ガリレオによる。
- 天動説の聖書の根拠：「日よ、とどまれ、ギブオンの上に」（ヨシュア記10:12）。
- ニュートンの万有引力の法則は、天と地を同じ法則によって統一した。



人間中心主義の 終わり



- 進化論革命
 - 19世紀、ダーウィンによる
- ワトソンとクリックによるDNAの二重らせん構造の発見（1953年）
 - 生物の構造を分子レベルで解明することが可能となってきた。
- 自然の一部に位置づけられた人間
 - 霊長類に対する知識の増大



無限な世界という幻想の終わり

- 地球環境の有限性（資源・大気）を認識するようになる。
- 1962年、レイチェル・カーソン『沈黙の春』
- 1973年、第一次石油ショック
- 1997年、地球温暖化防止京都会議
- 2008年、G8北海道洞爺湖サミット
 - 2050年までに世界全体のCO2排出量の少なくとも50%の削減を目指す。
- 2011年3月11日、東日本大震災



新たなコスモロジーの必要性

- 人類は進歩（進化）しているのか？
- 「こん棒をやたらとふりまわした洞穴時代の人間に比べて少しも進歩せず、近代人は化学薬品を雨あられと生命あるものに浴びせかけた。・・・《自然の征服》——これは、人間が得意になって考え出した勝手な文句にすぎない。生物学、哲学のいわゆるネアンデルタール時代にできた言葉だ」（レイチェル・カーソン『沈黙の春』）。

責任論

- 責任 —— 倫理的行為の根拠として。他者への応答可能性。
- 生命倫理と環境倫理の反転関係
 - 生命倫理は「自己決定」を拡大し、環境倫理は「自己決定」を縮小する。
 - 生命倫理は「人格」を縮小し、環境倫理は「人格」を拡大する。
- 「自己決定」による責任の限界
 - 過去の戦争責任
 - 未来世代に対する責任

無関心との戦い

「愛の対極にあるのは憎しみではない。無関心である。美の対極にあるのは醜さではない。無関心である。知の対極にあるのは無知ではない。それもまた無関心である。平和の対極にあるのは戦争ではない。無関心である。生の対極にあるのは死ではない。無関心、生と死に対する無関心である」（エリ・ヴィーゼルほか）。